

バスルームから出てきた苑実が、リビングのラグ上でぺたりと座り込んだ。その際、ソファに腰かけていた光嶋の膝に体重をかけて寄りかかってこられて苦笑し、生乾きの髪を撫でる。

「だから、無理するなって言っただろう」

「……でも、昨夜、入れなかったし」

憔悴ぎみの表情が痛々しい彼は、例の偏頭痛に見舞われてまる一日近く寝込んでいた。そして、起き上がれるようになって早速、入浴してきたところだ。

昨日、日勤を終えた光嶋が帰宅したときには、まだ予兆レベルだった。いつもどおり氷嚢で冷やす予防措置をとったが、発症してしまったのだ。

床に就いたときまでは幾分平気そうだったが、昨夜夜半、亡霊の囁き泣きめいた音が聞こえて、最初は心霊現象かと疑った。

しかし、聞き覚えのある声だと認識し、名前を呼ばれるに至って目覚めたら、隣で寝ていたはずの苑実がいなくて驚いた。

どこへ行ったらと慌てて電気をつけてみれば、ベッドの真下にぱったり倒れていた。どうやらベッドから降りたのはいいが、そこで力尽き、光嶋を弱々しく呼んでいたとみえる。

おそらく、ナイトテーブル上の薬を起きて飲むつもりだったのだろう。それが、いつもの我慢しすぎが逆に仇となり、具合が悪くて身動きできない状態になったに違いない。

すぐさま病院へ運ぶにも、吐き気もあると聞いては迂闊に動かせなかった。なので、とりあえずベッドへ寝かせて経過を見守ることにした。

同居後、彼が頭痛で寝込むのはこれで二度目だ。前回はいくぶん軽くすんだらしく半日で治ったが、今回は本格的で痛み苦しむ姿はかなり気の毒だった。

そのせいか、苑実がこれまで服用してきた市販の鎮痛剤と比べ、処方薬は効用が緩やかに感じたようで、途中何度も愚図られた。

市販薬がダメなら処方薬を大量に飲むだの、時間を空けずに飲むだのである。果ては、点滴みたいに血管から直接入れてと、医者である自分をげんなりさせる台詞に眩暈を覚えつつ、心を鬼にして拒んで宥めつづけた。

今日、仕事が休みで本当に助かった。これで出勤だったら、彼の体調もだが、自分がいない間になにをしてくるか気が気ではなかったろう。とはいえ、大切な相手がつらそうなのは、見ていてこちらも相当にきつい。

本当に、替わるものなら替わってやりたいと心底思った。

嘔吐感があるため、苑実は食欲も当然なく、水すら受けつけないまま絶食状態で臥せっていた。夕方過ぎ頃からようやく落ち着き始め、夜にはベッドを抜け出すまでになった。

空腹も訴える快復ぶりに安堵し、煮^{にゅうめん}麺をつくってやると、ゆっくりと完食してひと息つくなり、風呂に入ると言い出した。

入浴は意外と体力を使うのでとめたが、彼はとまらずに現状へ至る。案の定、ぐったりと疲れた様子の華奢な身体を横抱きにしようと立ち上がる寸前、視線が絡んだ。

「なに？」

「ベッドに運ぼうかと」

「ん、ありがと。でも、いいよ。もう寝飽きたから^{たかなり}崇成のそばにいたい」

「そうか」

ならば、せめてソファの上にと抱き上げて隣に座らせる刹那、光嶋の膝上がいいと駄々をこねられた。却ってきついのではと懸念するも、本人が譲らず結局は好きにさせる。

光嶋を跨ぐ体勢で向かい合わせに座り、胸元に全身でもたれかかった苑実が、肩口に頭を乗せてきて息をついた。

慰撫の念を込めて細い背中をさする光嶋の首筋が、ちくりと痛む。腕の中の彼に噛みつかれたのだ。

「おい。腹が減ってるなら、なにかつくってやるから俺を食うな」

「違うよ。ちょっと復讐してるだけ」

「復讐？」

報復される心当たりがなくて眉をひそめたら、なんとも恨みがましい目で見られた。

「頭、割れそうに痛かったのに、崇成ってば薬飲ませてくれなかった」

「処方薬を用法用量どおりに飲ませたはずだがな」

「あんな効きにくいの意味ないし。すぐつらかったんだからね。一日で治ったのは奇跡かも。もっと即効性のある強い薬がいい」

「……検査入院の意味がわかってるのか」

「痛みで死んだらどうするの。激痛致死だよ。いかにも痛そうな感じで嫌すぎるでしょ。実際、涙が出るほど痛いんだけど。どんな姿勢をとっても痛いんだけど。なんてことない瞼を開ける動作だけでも痛いんだけど」

しばし、怨念たっぷりの『だけど』攻撃に晒される。

処方薬が効きづかったことを根に持たれているとわかって苦笑した。しかし、ねちねちと八つ当たりげみに不満を言われても、こればかりは譲歩不可だと窘める。

「あいにく、医師として命を危険に晒す行為は看過できない」

今後もこの方針でいくとつけ加えると、顔を上げた苑実が無然と光嶋を睨んだ。

「堅物崇成」

耐え難い激痛で苦しむ恋人を平然と見てるなんてと詰られて、さすがに目を眇める。

不機嫌オーラを察知したのか、言いすぎたといった表情で瞳を揺らし、唇を噛んだ彼に光嶋が悠然と口を開いた。

「なら、医師としてじゃなく、恋人の立場で言わせてもらおうとだ」

「…はい」

「おまえの身体は、もうおまえひとりのものじゃない。俺のものでもあるんだから、粗略に扱うのはおまえ自身でも許さない」

「……っ」

一瞬で耳まで朱に染めた苑実が視線を逸らすのを許さず、さらにつづける。

「逆の立場になって考えてみる。薬剤アレルギーの俺に痛いのは苦しいからって、副作用も確実に出るわけじゃないから大丈夫ってねだられて、体質には合わない薬を飲ませて、仮にその服薬が原因で俺が死んだら、おまえはどうする？」

「あ…」

「俺は、そんなことで大事な恋人^{おまえ}を失うなんて御免だな」

「…うん。そうだね」

真実味を帯びた仮定で説得力充分だったのか、彼が深くうなずいた。神妙な態度に光嶋も表情を緩める。

「じゃあ、俺を愛してるなら、おまえを失ったら生きる気力も失うだろう俺を悲しませないためにも、今後は決められた量の処方薬以外は飲まないって誓えるか」

「誓うよ。崇成を愛してるから」

ひどいことを言ってごめんと謝りながら、誓いのキスのように光嶋の唇を啄んだ苑実がいったん顔を離し、小首をかしげた。

「ねえ。崇成、抱いて？」

「病み上がりで、おまえは…」

「あんな殺し文句で僕を煽ったのは誰なの」

相変わらず無茶の塊の恋人に眼鏡を外され、首に両腕を回される。潤んだ瞳で再三理性に喧嘩を売られては、光嶋も抗いきれなかった。

「ったく」

「あ…んっん」

ソファに細い肢体を組み敷いて吐息を奪う。舌を搦めて唾液を交換しつつ、パジャマをはだけさせ、下肢は下着ごと脱がせてしまった。

キスをほどいて、前回つけて消えかかっている鬱血痕の上からまた刻む。胸の突起を甘噛みする傍ら、ほっそりした脚を片方ソファの背もたれにかけて開かせた。必然的に陰部が全開になった淫らな眺めが楽しめる。

「ちょ……崇、成っ」

「閉じるな。舐めて濡らさないでだろう」

「で、も……恥ずかし…」

「今さら。抱いてってねだったのはおまえだ」

「そ……あ、んんっ」

腰を引き寄せ、舌と指を使って後孔を舐めほぐす。羞恥に悶えて涙ぐむ嬌態も堪能し、快樂に蕩けきって本能に立ち返るまで知り尽くした弱点を弄りまくった。

「ああ、ん……も、きて…崇成」

お願いと泣き濡れて光嶋の股間へ手を伸ばす彼に笑い、手早く下肢の衣服を寛げて要望を叶えてやる。

あえかな悲鳴をこぼす唇を唇で塞ぎ、狭隘な内壁の奥へと楔を穿った。柔軟に受け入れられると同時に味わえる抵抗感も心地よく、すべてをおさめて間もなく挿入を始める。

「んう…あつあ……ま、だ…動かな…っ」

「悪いが聞けないな」

「や、んあ……崇、成…っ」

光嶋の大きさに馴染むまでは待てと制止をかけられたが、あれだけ煽られては無理だ。

光嶋が性感帯に変えた粘膜を執拗に攻め、一度ならず二度目も挑んで苑実の声が囁れるまで啼かせたにもかかわらず、疲れたけれどこんなに愛されてうれしいと、それこそ殺し文句を言い返されて参った。

行為後ふたりで風呂に入り、後始末を終えてベッドに入ると、彼が囁く。

「崇成、ありがとう」

「なにがだ」

「僕のそばにいてくれて。こんな僕を選んでくれて、愛してくれて。ほんとにありがとう」

「苑実」

「僕のすべては崇成のものだから、お返しに好きにしていから」

「…ああ」

その存在自体が愛おしいのに、さらに無防備な発言をする恋人には一生敵わないと思いつつ、光嶋は苑実を抱きしめた。